

5 雨中嵐山 幸野棟嶺

一幅

明治十五年（一八八二）  
絹本着色  
一四一・五×六九・四

満開の桜が雨に煙る春の嵐山、そのふもとを流れる保津川をひとりの男が筏で下っている。桜の枝の下をくぐったその頭上にも、雨にうたれた花びらが数枚舞い落ちてゐる。京都の嵐山は、延喜七年（九〇七）の宇多法皇の御幸がなされるなど古くから貴紳の遊覧の地であり、紅葉の名所として歌に詠まれた。建長七年（一二五五）に後嵯峨上皇が離宮亀山殿造営に際して奈良の吉野山の桜を移植してからは、桜の名所としても親しまれてきた。江戸時代に入って保津峡の開削が行われると、上流の丹波地方で切り出した材木を筏に組んで嵯峨まで運ぶようにな

り、この筏流しもまた風情のある光景として京都の絵師たちの好画題となった。幸野棟嶺（一八四四〜九五）は、嘉永五年（一八五二）に円山派の中島来章に入門し、明治四年（一八七二）には山水図を学ぶべく四条派の塩川文麟に入門し直して画風の幅を広げた画家である。幾度となく歌に詠まれる中で培われた嵐山の詩的イメージを見事に絵画化しているところには、情感豊かな絵画を得意とした四条派の正統的な流れを感じさせる。明治十五年に龍池会より買い上げられたとされる作品。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan